

報告

東アジア科学教育学会 2016 年大会報告

富田晃彦（和歌山大学）

1. 東アジア科学教育学会

天文教育普及研究会が後援団体の 1 つに加わって、東アジア科学教育学会 2016 年大会（東京国際会議、EASE2016Tokyo）が開かれた（当会が後援するという報告は [1] 参照）。大会実行委員長の東京理科大学の小川正賢氏に代わり、この大会参加の富田が、後援感謝を含めて報告をしたい。

東アジア科学教育学会 [2] は、2007 年に創設された若い学会である。2009 年に台湾・台北で初めての大会を持ち、以降、2011 年に韓国・光州、2013 年に香港、2015 年に北京とほぼ 1 年おきに大会を持ち、2016 年に東京で初めての日本開催となった。次回は 2018 年に台湾・花蓮で開催予定である。2015 年の次に 2016 年としたのは、同じく隔年で大会を持つ欧州科学教育学会 [3] と開催年が交互になるようにしたことが理由の一つである。学会の運営は大会を持った上記 5 地域の共同で行われている。大会参加は世界に開かれ、招待講演者から一般参加まで、上記 5 地域以外から毎回多数の参加がある。

2. 2016 年の東京大会

第 5 回大会となる 2016 年の東京大会 [4] では、扱うテーマとしてカリキュラム、ICT 活用、STEM 教育など、14 の領域が設定された。大会 1 日目（7 月 25 日）は事務セッションが中心で、大会 2 日目（7 月 26 日）から 4 日目（7 月 28 日）の 3 日間に研究発表が集中して行われた。総会講演（Plenary）は 2 件、基調講演（Keynote）は 8 件、シンポジウムは 10 件、ワークショップは 14 件、デモンストレーション（演示）は 11 件、口頭発表は約 320 件、ポスター発表は約 200 件と賑

わい、研究発表はすべて東京理科大学神楽坂キャンパス（東京都新宿区）で行われた。

3. 言語、年齢、分野を越えた交流

使用言語はすべて英語で、日本人にとって言語の壁という問題が立ちはだかる。しかし、そのような問題を感じさせない、幅広い参加者層であった。大学院生をはじめとした若手からベテラン、そして大学教員だけでなく学校教員も多数参加していた。高校生の参加も見られた。日本の高校生も英語での研究発表で奮闘していた。東アジア 5 地域それぞれから多数の参加があり、国境を越えての研究議論が活発に行われた。当会が後援するのにふさわしい学会、大会であったといえよう。

文 献

- [1] 「事務局からのお知らせ：後援事業の承認について」（2015）天文教育, 27 (6): 56.
- [2] East-Asian Association for Science Education <http://theease.org/>
- [3] European Science Education Research Association <https://www.esera.org/>
- [4] 東アジア科学教育学会 2016 年大会（東京国際会議（EASE2016Tokyo）
<http://ease2016tokyo.theease.org/>